

國學院大學學術情報リポジトリ

研究論文 宗教の境界線：学生に対する意識調査から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001831

宗教の境界線—学生に対する意識調査から

井上順孝

はじめに

現代日本人の宗教を論じる際に、宗教を信じている割合、ないしは信仰をもつ割合に関する世論調査の類がしばしば用いられる。ここ20年くらいは、その割合はほぼ20%と30%の間である。これを根拠に逆に宗教を信じない人は7割以上と表現されたりもする。

だが、「あなたは宗教を信じていますか?」とか「あなたは信仰をもっていますか?」といった問いに対し、同じような時期に聞かれたのであれば、人はつねに同じ答えをするのであろうか。たとえば問うた相手や状況によって本当のことを言う、言わないという違いはないのだろうか。日本のように宗教という言葉自体が必ずしもいい意味ではない社会であると、実際には特定の宗教を信じている、あるいは信仰をもっているということを「隠す」という局面も考えうる。相手がどの程度真剣に問うているかによっても、答が異なる可能性があるだろう。

同じ内容の質問であるにもかかわらず、同一人物の回答に違いが生じうる場合を想定して、その違いを本論では「回答のブレ」と表現しておく。回答のブレは無記名のアンケート調査の場合にも起こりうる。対面状況でなされる質問ではなくても、そもそも誰が作成した質問項目か、どのような目的の調査か、アンケート全体がどのような質問からなるか、といったことが回答に影響を与える可能性があるからである。

一般的にアンケート調査の質問内容は、大きく分けるとその人のいわば固定的事実を問うものと、その人の感想、見解、意見といったものを問うものがある。回答者の属性に関する質問、すなわち年齢、性別、学歴、出身地などといったものは固定的事実を問うものに含まれる。固定的事実を問う質問に対する答えのブレは、回答者が故意に事実と異なる答えを選んだり、記載したりするのでなければ、基本的にきわめて少ないと考えるべきである。

他方、ある政党を支持するかとか、サッカーが好きか、桜の花は好きかといったような質問は、ある事柄に対するその人の感想、見解、意見といったものを問うものである。これらもそのときどきのその人に関する事実と言え事実とみなしうる面があるにしても、回答内容は短期間でも変わりうるもので、固定的事実とは言いがたい。また質問の仕方によって肯定か否定が変わることさえあるのは、調査経験者にはよく知られたことである。短期間で変わりうるというのは、今日ある政党を支持していても、何かのきっかけで明日支持しなくなるかもしれないというような場合を指す。質問の仕方が影響する例は、「桜の花が好きですか?」と言われて「ハイ」と答える人が、「次の花のうち、最も好きな花を選んでください」と聞かれて、桜ではなく菊を選ぶような場合である。「サッカーがとても好きですか?」と「サッカーが好きですか?」でも、答えが「ハイ」となる割合が若干変わりうる。

では信仰の有無を聞く問いは、固定的事実を問うものに属するのか。それとも感想、見解、意見などを問うものに属するのか。少なくとも現代日本人を対象とした調査に限るな

ら、基本的には後者に含めた方がよさそうである。この問いは「〇〇寺の檀家ですか」あるいは「〇〇教団の会員となっていますか」という類の問いとは少し異なる。信仰の有無に関する問いへの回答が、自らの考えや行為への自己認知に依存しているからである。たとえば、「仏壇に手を合わせるのは自分の家の習慣だ」と思っていた人が、「仏壇に手を合わせるのは信仰をもっていることになるのだ」というふうに認知の仕方が変わった場合、自らの信仰について問われたときの回答が異なる可能性が出てくるからである。

見解や意見の類には回答のブレがつきものにしても、信仰の有無に関する問いには、さらに信仰という概念そのものが、現代日本ではかなりの曖昧さがあるということが介在してくる。概念につきまとう同様の曖昧さは、「あなたは幸せですか?」「あなたは日本を愛していますか?」などといった問にも共通してある。問われている概念をどう考えるかは、人によってかなり異なるからである。幸せ、愛といった言葉は通常の会話や文章などでは頻繁に使われるが、これらが具体的には何を指しているかはたいてい棚上げにされている。

信仰の有無の間には、アンケート質問の全体がもっているコンテキストが重要である。これも幸せや愛にもある程度あてはまるが、現代日本において宗教や信仰を問うときに生じる特有のコンテキストがある。幸せや愛という概念が否定的な響きをもつことはまずないが、信仰や宗教はそうとは限らない。場合によってはかなり否定的ニュアンスを含みうる。日本はイスラーム世界などとは違って、信仰や宗教をもつことが人間にとって当然であるという社会ではない。のちに具体的に数値を示すが、学生たちにとっても「宗教はアブナイ」という感覚は少なくない。そうであれば、アンケートへの回答者が自分の現在の状況に対し、それが「信仰をもっている」と言えるのかそうでないのかを判断するに際して、アンケート全体のコンテキストに左右されて回答するということが十分考えられるのである。

質問紙を用いた無記名のアンケート調査の際に、自分の信仰や宗教に関わる回答のズレはどれくらいの幅がありうるのだろうか。またそのずれはどのような要因によってもたらされるのだろうか。10 数年にわたって実施された学生に対する調査結果、及び関連する 2 つの別の調査結果を合わせることで考察を試みる。

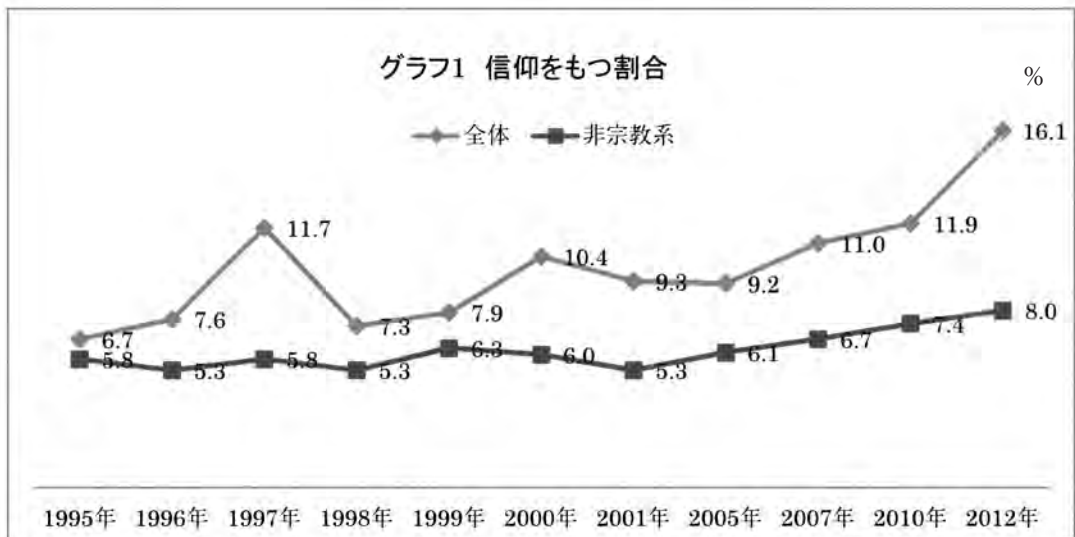
1. 学生に対するアンケート調査に見られた数値の違い

まずとりあげるのは、国学院大学日本文化研究所と「宗教と社会」学会・意識調査プロジェクトが合同して実施し、1995 年から 2012 年までに 11 回を数える学生意識調査である(以下「意識調査」と略)¹⁾。

このアンケート調査では、宗教にどの程度関心があるかという質問を毎回設定している。回答の選択肢は、次の 4 つである。

1. 現在、信仰をもっている
2. 信仰はもっていないが、宗教に関心がある
3. 信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない
4. 信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない

この質問に対し、「1. 現在、信仰をもっている」を選んだ学生の割合は、非宗教系の大学に通う学生のみで集計すると、1990 年代後半から 2000 年にかけては 5～6% 台を推移していた。ところが 2005 年以降少しずつであるが増加傾向が明らかになり、2012 年の調査では 8.0% に達した。2000 年代にはいって、信仰をもつ学生は増える傾向にある。(グラフ 1 参照)



この数値の変化をオウム真理教事件との関係で解釈することも可能である。つまりオウム真理教による地下鉄サリン事件の起こった1995年から数年間は信仰をもつ学生の割合はあまり高くなく、しかもさほど変化はなかった。けれども、21世紀にはいり事件をあまりリアルに受け止めていない世代が大学生になるとともに、少しずつ信仰をもつ学生の割合が増えたということである。この解釈はこれだけでは説得力が弱いのであるが、事件前の1992年に行った国学院大学日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによる別の調査²では信仰をもつ学生の割合が95年の倍近かったことや、95年以降の調査で、宗教への印象とオウム真理教による事件との関係について質問したいくつかの項目の回答結果を踏まえると、それなりの説得力を有する³。

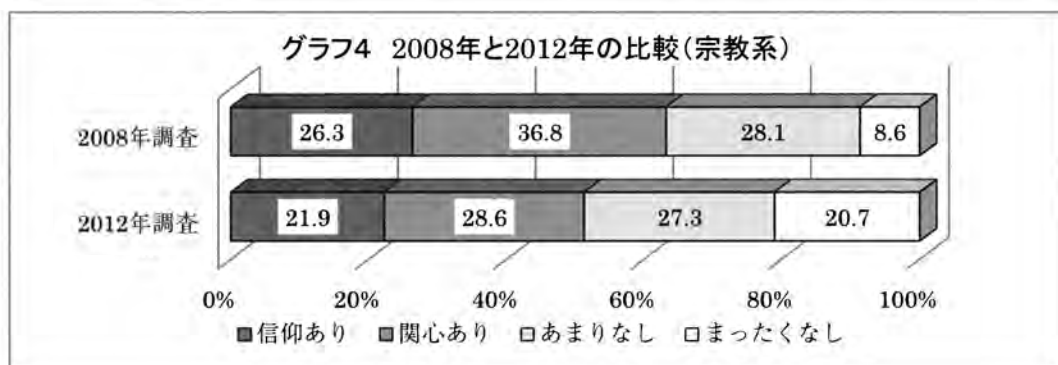
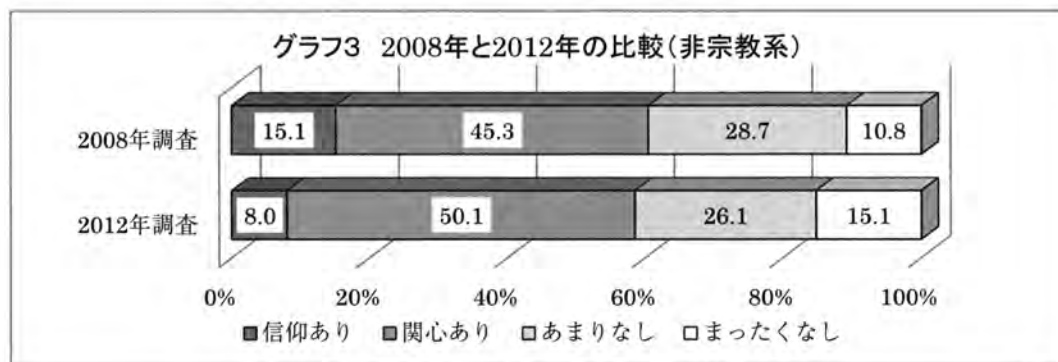
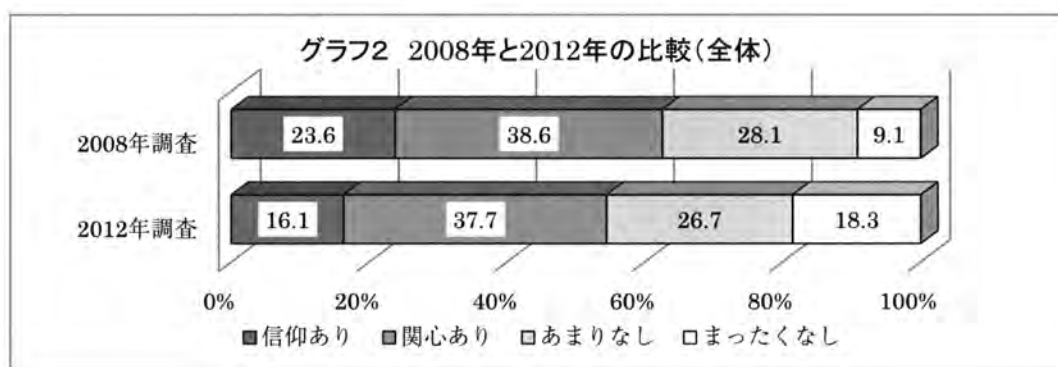
しかし、ここで議論するのは、この間の数値の変化が何によって生じたかではなく、回答のブレを示す数値に関してである。この意識調査とは少し異なった目的をもって実施した2008年の調査（宗教文化教育に関する学生の意識調査）における同様の内容の質問では、数値がこの一連の調査の傾向と大きく異なっている。同じ質問と同じ回答の選択肢であったのに、なぜ2008年の調査で出てきた数値が意識調査の数値の傾向から大きく外れるものとなったかである。

2008年の調査は平成20年度科学研究費補助金基盤研究（A）「大学における宗教文化教育の実質化を図るシステム構築」（研究代表者 大正大学教授・星野英紀）による研究の一環として行われたものであった（以下「科研調査」と略）⁴。このアンケートでは、「意識調査」と同様の質問と回答の選択肢を用意したにもかかわらず、「1. 現在、信仰をもっている」を選んだ学生が非宗教系大学でも15.1%に達したのである。ちなみに宗教系大学を含めた全体では23.6%となり、これも「意識調査」で最も多かった2012年の16.1%よりずっと高い数値であった。

「信仰をもっている」と回答した学生の割合が「意識調査」においては比較的安定した数値をとっているのに対し、その間に実施された2008年の「科研調査」の数値だけが大きな違いを示したということである。これは何に起因するのであろうか。その後実施された2010年と2012年の結果を見るなら、2008年頃から学生の意識が急に変わったと考えるのは

妥当ではない。また調査対象とした学生が所属する大学が、この年だけ宗教に親和性をもつ大学が多かったのでもない。「意識調査」は毎回30～40程度の大学で実施してきたが、実施した大学は毎回少しずつ異なる。常連の大学とそうでない大学がある。したがってそれから生じる数値の揺れということも念頭に置く必要があるが、実際の数値に大きな差はなかった。

2008年の調査も36大学が対象であり、調査メンバーは「科研調査」の調査メンバーととくに大きく変わっているわけでもない。ではなぜこのように2008年だけ突出した数値になったのか。一つ考えられる理由は調査時期である。「意識調査」は毎回4月を中心に行われる。遅いものでも6月である。



いずれも回答者は1年生が最も多く、だいたい4割台を占める。一応4月～6月とはなっているが、大半は初回や2回目など講義の早い段階でなされている。担当教員の影響がまだ少ない時期と考えられる。これに対し「科研調査」は2008年の10月から12月にかけて行わ

れた。受講生は仮にその教員が講義において宗教について触れたならば、その教員の視点なり見解から影響を受ける度合いが高くなると推測できる。つまり大半が4月に実施された調査と、10月～12月に実施された調査という、時期がもたらした差という要因である。講義の内容によっては受講した学生の宗教に対するものの見方がかなり変わる可能性があるのは明らかである⁵。

だが、講義内容が宗教観に影響をもたらしたとしても、それが信仰の有無にまで大きく影響するとは考えにくい⁶。調査を実施した教員の過半数が多少なりとも宗教に関するテーマを扱っているのは、両調査とも同じである。「科研調査」の方は、理科系の学生の意見も聞きたいということで、自然科学系の授業を担当している教員にも調査を依頼した。つまり「科研調査」の方が教員からの宗教的影響はむしろ小さくなる可能性すらある。1つ可能性があるとするれば、実際には信仰をもっていた学生が、学期初めの4月の調査段階では、信仰をもっているとは答えず、いわば信仰をもっていることを隠したのに、10月くらいになると教員の宗教に対するスタンスも了解できて、隠さなかったというようなケースである。こうした例も実際あったが⁷、それが数%にのぼるとも考えにくい。

調査時期の違いだけで、これほどの違いをもたらすとは考えにくいとすると、他の可能性として、「意識調査」と「科研調査」の質問項目全体の構成が明らかに異なるという点がある。意識調査では、生まれた年、性別、卒業した高校の別（公立、私立、宗教系など）、大学・学部の名称、住居形態、家の宗教を聞いたあとに、質問項目の比較的早い段階で回答者の信仰について質問している。そして具体的な信仰を選択肢から選ぶようになっている。神道、仏教、キリスト教、新宗教という区分の他、仏教の主な宗派名、キリスト教ならカトリックとプロテスタントの別など、また新宗教なら創価学会や天理教など主だった教団名が例示されている。つまり具体的な宗教名を連想させる質問になっている。

最初にこうして信仰について質問したあとに、宗教行為や宗教的事柄への意見、宗教に関する時事的な話題などについての質問が続いている。つまり、回答者の立場に立てば、宗教に関するいろいろな事柄を連想し、自分の経験と照らし合わせるなどの心的な営みをする以前に、自身の信仰の有無が問われ、しかも具体的な宗教名、教派・宗派名などが前提とした信仰について問われるのである。

これに対し、「科研調査」は信仰に関する質問は最後である。そして具体的な宗教名は例示されていないし、記載することも求めている。そしてこの質問以前に宗教文化についてのさまざまな意見を求めている。それは具体的な宗教名を前提としたものというより、一般的な宗教文化についての問いかけである。たとえば質問3では次の5つの事柄について「1. はい」または「2. いいえ」で答えるようになっている。

1. 外国人に日本の宗教のことを少しは説明できるようになりたいと思いますか
2. 宗教によっては、食べられない食べ物があることを知りたいと思いますか
3. 国際情勢を深く理解するために、もう少し宗教の知識を増やしたいと思いますか
4. 宗教が関係した事件や紛争の背景を知りたいと思いますか
5. 国ごとの宗教による人々の生活の違いを知りたいと思いますか

この質問の回答の選択肢の1は、日本の宗教を相対的に見る見方が養われていることを前提としたものである。選択肢の2以下で、宗教と食べ物、国際情勢、事件や紛争、生活との関係が提示されている。宗教が日本のみならず、国外のさまざまな出来事に深くかかわって

いることを想起させる内容である。

続く質問の4では、「宗教文化」に関する講義として次の11の選択肢があげられ、このうち大学の講義で履修してみたいものを複数回答で答えるようになっている。

1. 日本の伝統的宗教のしきたり
2. 新宗教と呼ばれている近代以降の新しい宗教の活動
3. キリスト教徒の生活
4. 暮らしの中の仏教
5. ムスリム（イスラム教徒）の戒律と実生活
6. 宗教が文学・音楽・美術・建築・映画などの文化に与えた影響
7. 宗教と観光・文化遺産との関わり
8. 世界の神話
9. 社会の出来事や国際問題と宗教との関わり
10. 現代のカルト問題
11. 生き方や死後の世界などについての、それぞれの宗教の教えの違い

この選択肢から、宗教文化に日本や世界の宗教の他に、文学・音楽・美術・建築・映画、また観光・文化遺産や世界の神話と宗教との関わりが提示されている。この質問によって宗教文化が日常生活のさまざまな面に関わっていることが、いっそう想起されやすくなる。

さらに次の質問では「次の職業のうち、日本や世界の「宗教文化」についての基礎知識があった方がいいと思う職業」を7つの選択肢から複数回答で選ぶようになっている。

1. 小学校、中学校、高校などの教員
2. 官庁や市役所などに勤める公務員
3. ホテル、旅行者など観光関連の職業の人
4. 国外勤務が多いことが予想される会社員
5. 宗教関係（神職、僧侶、牧師、教団職員など）
6. 病院や福祉関連施設に勤める人
7. テレビ局・新聞社・出版社などマスコミ関係の人

この質問もまた、宗教文化の知識がさまざまな職業に関係しうることを想起させる。宗教文化は現代社会において、大きな比重をもつことを実感する学生も出てくると推測される。こうした質問内容が、回答者に宗教ないし宗教文化を考えていく上での一つのフレームを提供したことになる。質問によってにわかにならぬ宗教観が変わるとか、宗教文化への理解が変わるといふことではなく、宗教が日常生活のさまざまな局面にかかわっており、自分たちにも接点が多くあることを回答者に連想させるということである。

ここで意識調査と科研調査のそれぞれがもつ質問のフレームの違いを整理してみる。意識調査では信仰に関する質問は比較的初めの方に提示され、しかも具体的な宗教名・教派名等が質問紙に例示してあるので、組織的な宗教を連想させる仕組みになっている。他方、科研調査は信仰に関する質問は最後に配置され、それまでの問は宗教というより広く宗教文化について想起させる内容となっている。

これが回答のブレに影響した可能性がある。ここで回答のズレを考えるポイントは最終的には一つかもしれない。それは自分が信仰をもつかどうかの判断をなすにあたっての「宗教の境界線」が、どこに存在するかである。神社の氏子総代である、ある寺の檀家総代であ

る、あるキリスト教会や新宗教のメンバーであるということをもって「信仰がある」という理解があろう。毎年欠かさず氏神社に参拝する、先祖の供養を熱心に行う、座禅が好きで定期的に通うお寺がある、聖書に惹かれその教えに沿うような生活を心がけている、こうしたことをもって「信仰がある」というふうに考える人もいるかもしれない。

考えなくてはならないのは、各人がもつそうした信仰のとらえ方、つまり宗教の境界線がブレのないものか、あるいは問われるコンテクストによって変わりうるものかである。

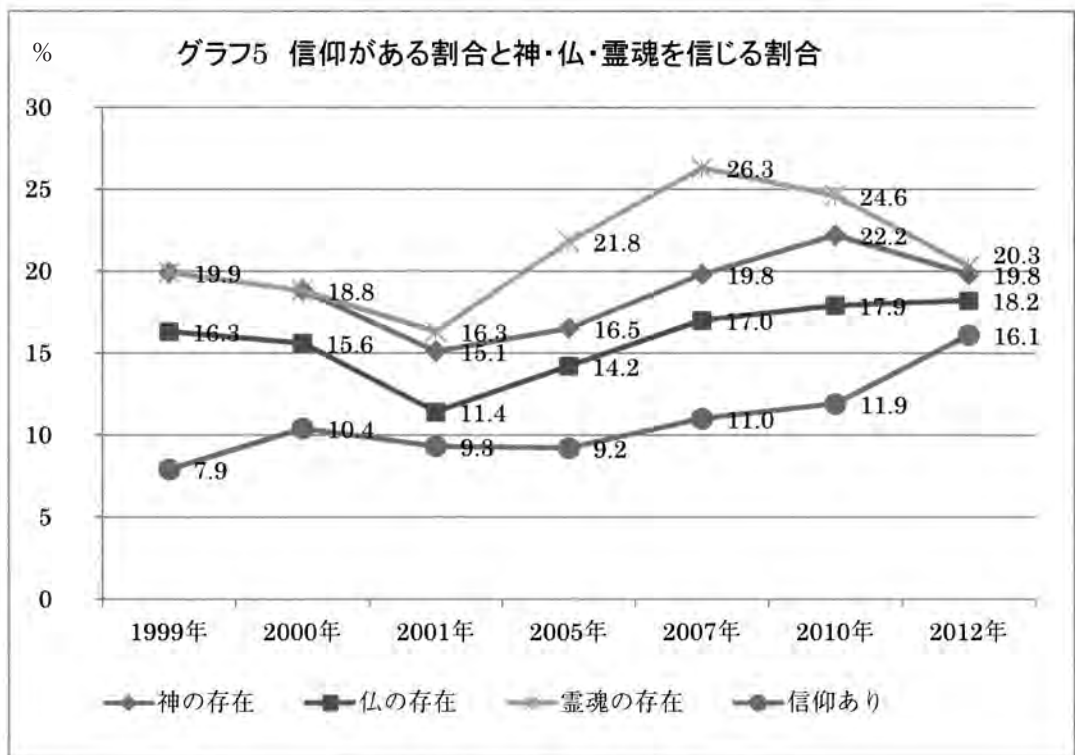
2. 信仰心と神仏の存在を信ずることとの違い

意識調査の結果をみていくと、問われるコンテクストということに関して、さらに検討すべき数値が出てくる。それは信仰があると答える割合よりも、神仏の存在などを信じると答える割合が常に高いということである。このことと回答のブレとの関係である。

そこで信仰の有無に関わる回答と神仏の存在を信じるかどうかの質問への回答をクロスしてみる。意識調査では1999年の第5回調査から引き続いて7回にわたり、神、仏、靈魂のそれぞれの存在について、信じるかどうかを質問している。回答の選択肢は、「1. 信じる、2. ありうと思う、3. あまり信じない、4. 否定する」の4つである。

「1. 信じる」を選んだ割合は、いずれの調査においても靈魂、神、仏の順に多い。なお、意外かもしれないが、神・仏・靈魂を信じる割合は、信仰の有無における違いと比べて、宗教系の大学と非宗教系の大学との間でたいした違いがない。そこで全体の数値で比較してみる⁸。

グラフ5を見ると分かりやすいが、神仏や靈魂を信じる割合と信仰ありと答える割合が比較的近い年といくぶん開きがある年がある。またその差は靈魂を信じる割合との間で最も変



動が激しい。霊魂を信じる割合と信仰をもつ割合とを比べると、霊魂を信じる割合が、1999年、2005年、2007年、2010年では倍以上である。これが誤差の範囲なのか、それとも調査年に何かその差を大きくさせるような社会的出来事があったのかは判断できない。ただ霊魂の存在を信じることは後に示すように、信仰だけでなくサブカルチャーとの関わりが深いと推測されるので、神仏の存在を信じる割合と比べて変動が大きくなっても、ある程度は説明がつけられる。2000年代になって復活したテレビの霊能者番組の影響、同じ頃高まったスピリチュアルブームやパワースポットブームなどとの関係も想定されるからである。

信仰は何と関係をもつのであろうか。宗教への関心の度合いについての回答を、神・仏・霊魂の存在を信じるかの回答とにそれぞれクロスさせてみる。開きが最も大きかった2007年と最も小さかった2012年においてクロスさせた結果がグラフ6とグラフ11までに示してある。なお、いずれもどちらかに無回答であったものは省いてある。

2007年調査でも2012年調査でも、信仰がある者が神の存在を信じる割合は宗教にまったく関心がない者が神を信じる割合のおおよそ2倍である。そして「信仰はもっていないが、宗教に関心がある」「信仰はもっていないし、宗教にもあまり関心がない」「信仰はもっていないし、宗教にもまったく関心がない」は、つまり信仰をもっていないわけだが、彼らの間でも神の存在を信じる者は2割近くいることになる。ただし、ここで留意しなければならないのは、この場合にキリスト教的な神と神道的な神の双方がはいっているということである。どちらであるかは、どの宗教を信じていると答えたかによってある程度類推できる。

仏の存在を信じる割合はもっと顕著な結果になった。信仰がある者が仏の存在を信じる割合は宗教にまったく関心がない者が仏の存在を信じる割合のおおよそ4倍以上である。神の存在を信じることより、仏の存在を信じるの方が、信仰をもつと答えることと相関性が高いということを意味する。

霊魂の存在はどうか。グラフ10とグラフ11に示したように、信仰をもつものとそうでないものとの差が、神の存在とに比べてもわずかだが小さい。これは、霊魂の存在を信じるかどうかは、神や仏の存在を信じるかどうかよりも、信仰の有無との関係がより弱いということを意味する。

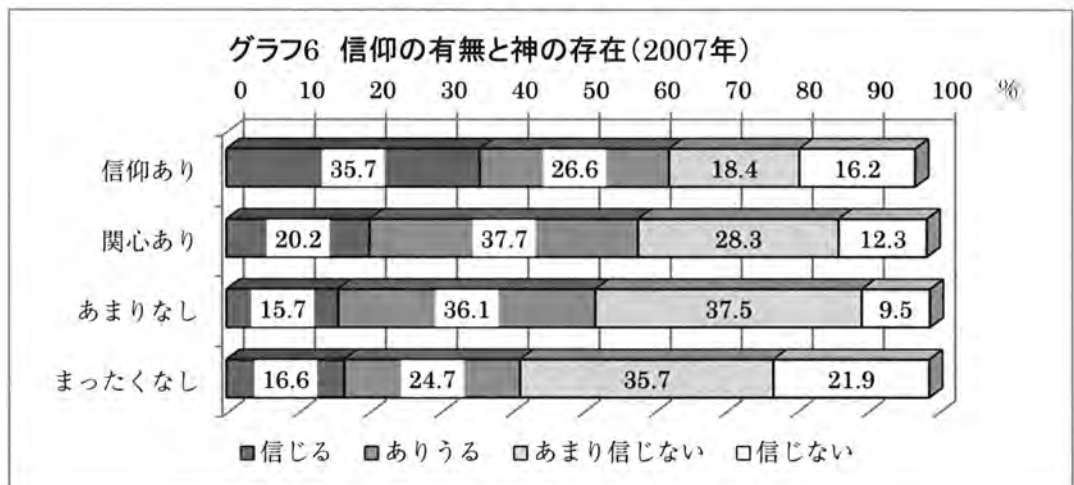
信仰をもっていると答えなくても、神の存在を信じていると答える人は2割近くおり、信仰をもっていなくても仏の存在を信じていると答える人も10数%いる。同じく霊魂を信じていると答える人は2割前後である。ここで明らかなのは、神を信じる、あるいは仏を信じるということと、信仰をもつということとはきれいに重なるわけではないということである。信仰をもつということを、特定の宗教組織（教会、教団、教派、宗派など）への所属としてとらえる人もいるので、こういう違いが出てくるのは当然である。

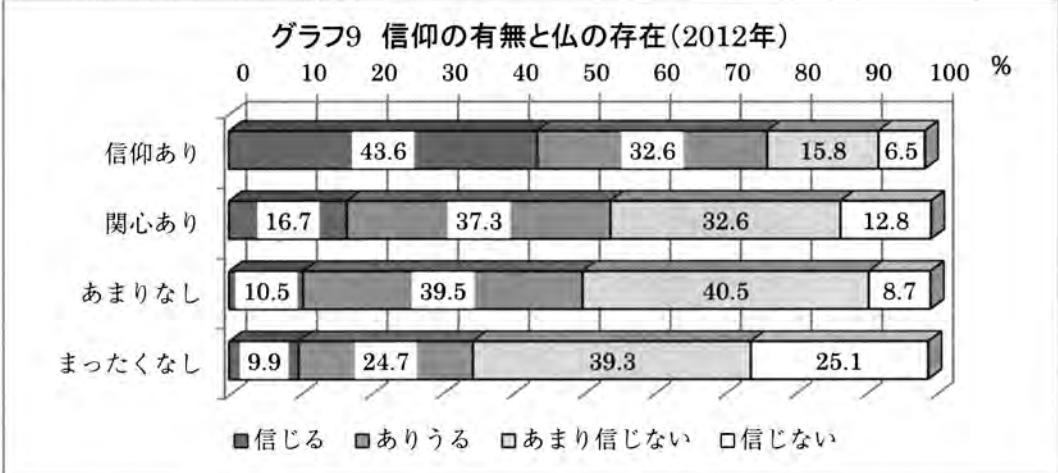
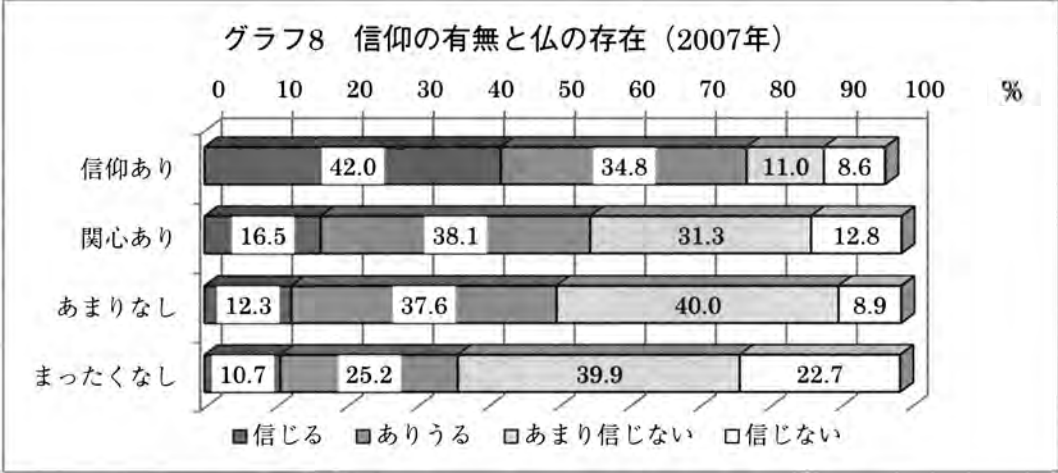
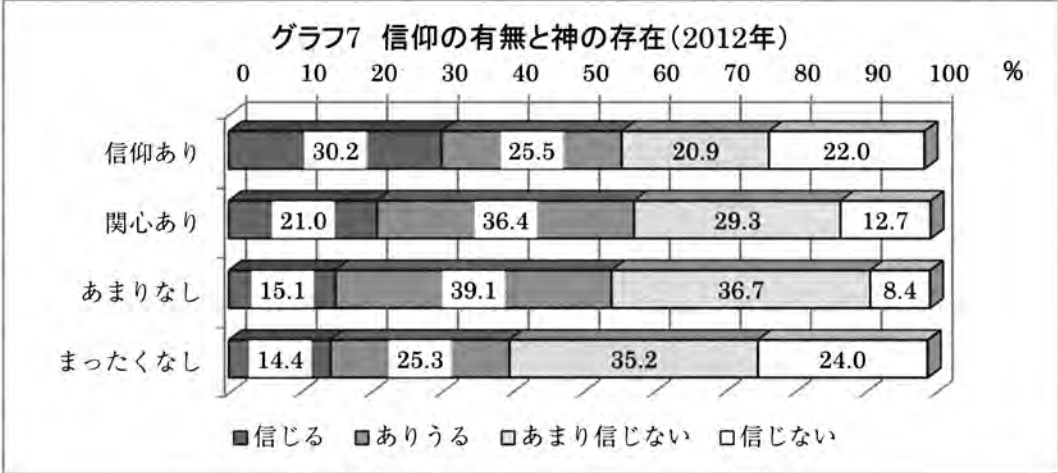
では信仰があるのに、神や仏の存在を信じないと答えた人はいるのか。2012年の意識調査では信仰があるのに神の存在を信じないと答えた人はグラフ7にあるように22.0%である。グラフには示していないが、信仰があるのに、神の存在も仏の存在も信じないという人の割合を調べてみると、さすがに3.9%とかなり減る。さらに、神仏の存在も、霊魂の存在も信じないけれども、信仰はもっているという人を調べると2.6%になる。この人たちは独特の宗教についての境界線をもっていると考えることも必要かもしれないが、あまり真面目に回答しなかった人もいる可能性を考えると、この数値を過大評価しない方がいいのかもしれない。

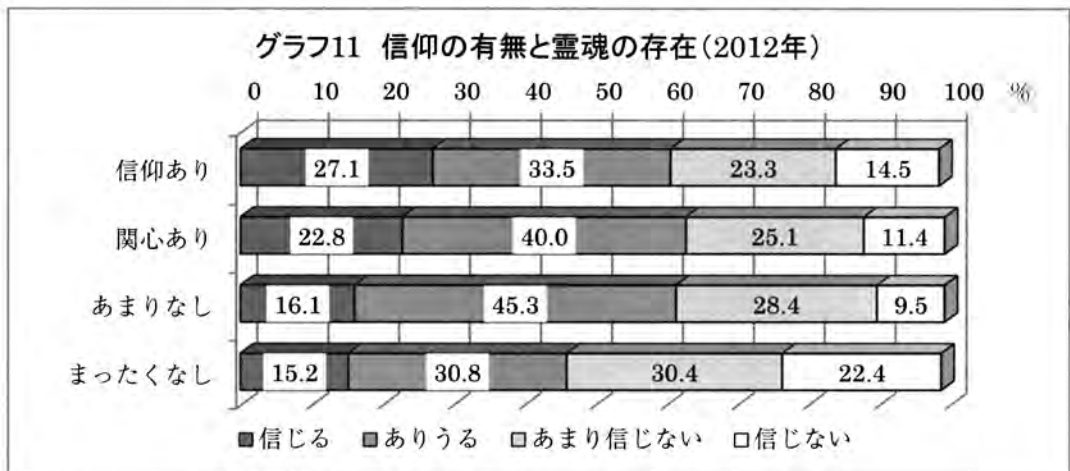
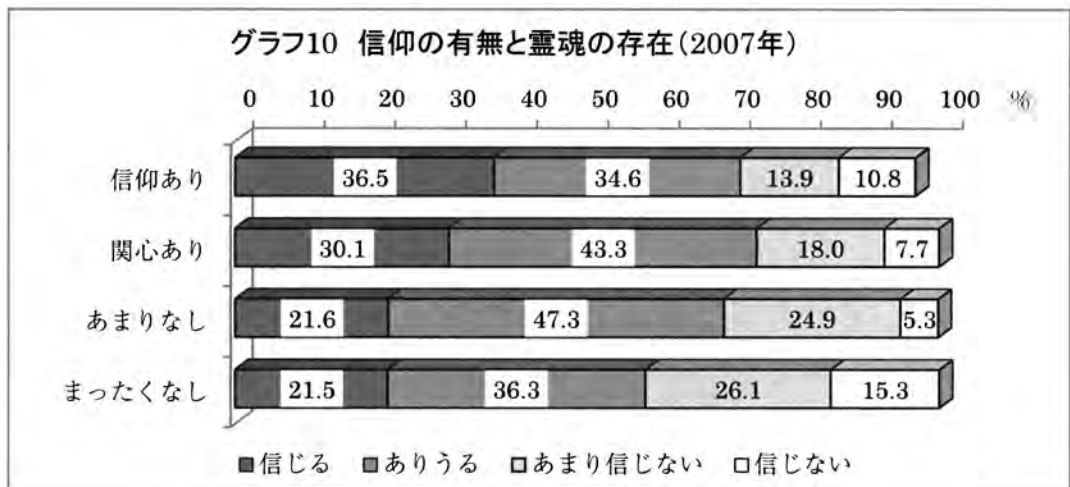
ただ、信仰があるのに、神の存在を「信じない」と回答した人に、「あまり信じない」と回答した人を加えた割合になると42.9%に上る。同様に神仏ともに「信じない」、または「あまり信じない」と答えた人を調べると15.2%になる。これに靈魂の存在まで「信じない」あるいは「あまり信じない」と答えた人の割合が11.2%である。神仏の存在を信じることと信仰をもっているとの間には、やはり少なからぬ乖離がある。

これについては神仏などの存在を信じるという表現自体が問題とされるべきかもしれない。というのも、神をどのようにとらえるかという問いでは、心の中にあるものという回答がもっとも多いのである。神を人格神的なイメージでとらえていない場合は、神の存在という表現に違和感を抱く可能性もある。これを判断する材料として、1999年の調査結果を見てみる。1999年は特別に1万人以上の回答者を得た年である。信仰をもつ人も865人になった。この年の結果では信仰をもつと答えながら、神の存在を「あまり信じない」または「否定する」と答えた人は286人、つまりから33.1%であった。この年はさらに信じる信じないにかかわらず神のイメージが次の1～6のどれに当たるかも質問した。右側の数字は、この286人のうち、1～6のそれぞれを選んだ割合である。「人の心の中にあるもの」と答えた人が最も多い。これは信仰をもっていると言いながら神の存在に否定的な人の中では、神を「人の心の中にあるもの」とイメージしている人が最も多いということを示している。したがって、神の存在という表現自体がこうした一見矛盾と見える回答を導いた理由の1つという推測がある程度は成り立つ。

	%
1. 宇宙を創造したり支配したりする唯一の存在	16.1
2. いろいろな役割や力をもつ複数の存在	5.6
3. いのちやエネルギーの源になるような存在	5.9
4. 宇宙の法則そのもの	5.6
5. 人の心の中にあるもの	32.5
6. 特定のイメージがわからない	28.0







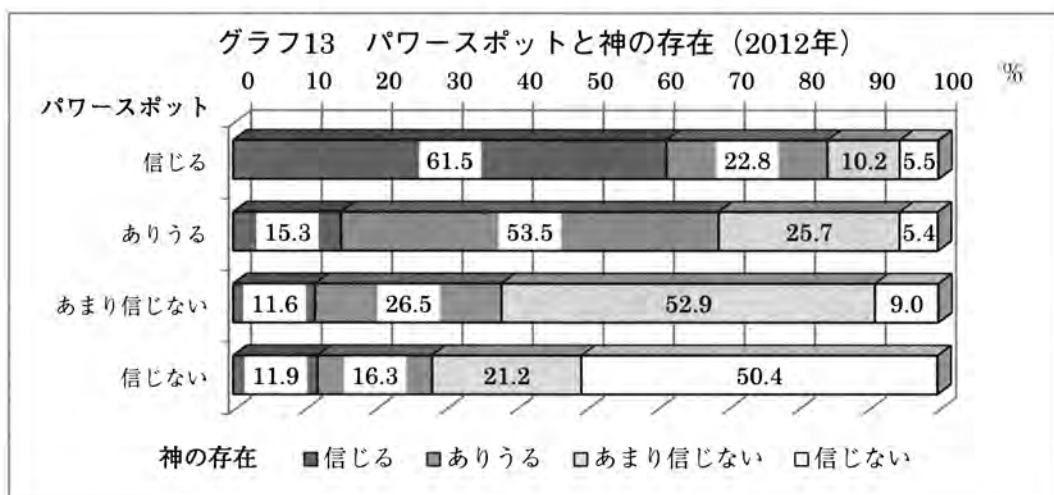
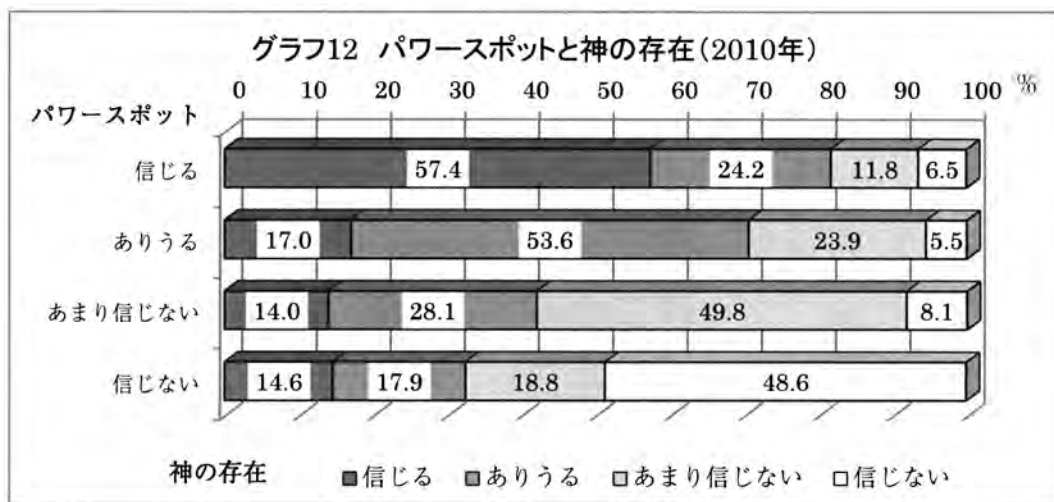
その人がもつ宗教の境界線は、アンケートの質問に提示された概念群、あるいは表現にとまどい、その場の判断で、境界線の内側に組み込むか、外側に追いやるかをしている場合があると考えられる。こうした問題も回答のブレに当然関わってくると考えなければならない。

さて、靈魂の存在を信じるかどうかは、むしろサブカルチャーとの関係が深い可能性がある。そこでサブカルチャーに関わりの深いパワースポットに関する質問を神の存在、靈魂の存在を信じる割合とクロスさせてみる。パワースポットについては、2010年と2012年に質問項目をもうけている。神・仏・靈魂の存在を信じるかどうかを質問に加えて、パワースポットを信じるかどうかも質問してあるからである。

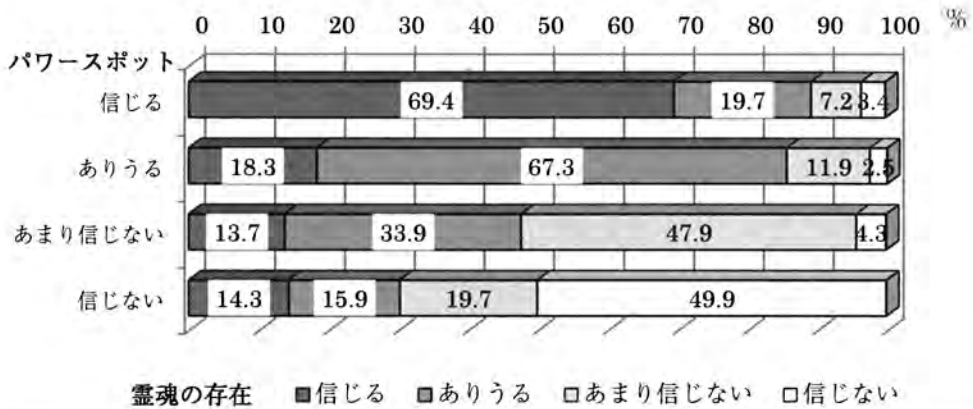
その結果がグラフ12～17に示してある。これを見ると、パワースポットの存在を信じることと、靈魂の存在を信じることの間には強い相関関係があることが明らかである。次いで神の存在を信じることとの間の相関関係が強い。仏の存在を信じることとの相関関係がもっとも弱い。パワースポット・ブームでは寺院よりも神社を訪れる人が多く、神社に行っても社殿よりも周囲の石や樹木、井戸などに関心が強いとされるが、その傾向とも合致する回答結果である。

2010年調査でも、2012年調査でもパワースポットの存在を信じる人の7割近くは靈魂の存在を信じている。逆にパワースポットの存在を信じない人は、約半数が靈魂の存在も信じない。肯定から否定への4つの回答の選択肢それぞれが互いに強い相関性があることが分かる⁹。

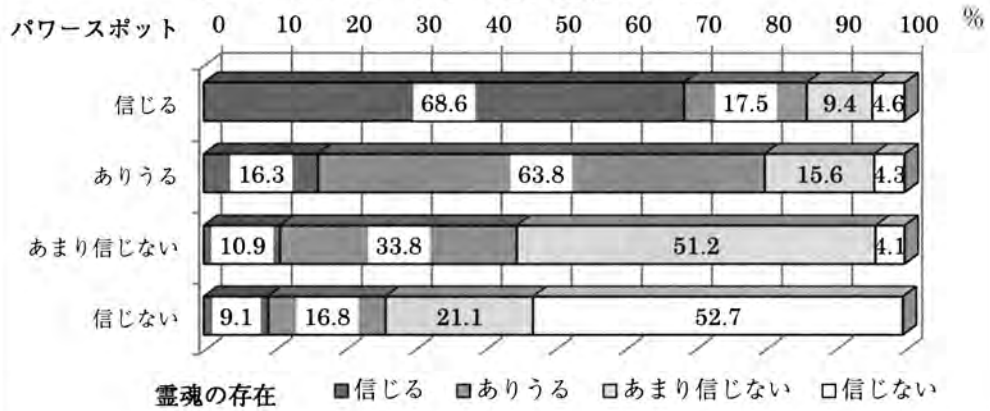
はっきりと信仰をもっていると回答しなくても、神仏あるいは靈魂の存在を信じる人が1割ないし2割程度存在する。その中でも靈魂を信じるという人はサブカルチャー的な関心と親和性が深い。これらの人たちを無宗教とか無信仰というカテゴリーに置くのはいささかためらいを感じる。当人たちも自分たちの意識や行動のあり方が、一般に宗教あるいは信仰と呼ばれているものとどれほど乖離しているのか、定めがたいのかもしれない。そのような自己認知の曖昧さもまた回答のブレに関わりをもっていると考えられる。



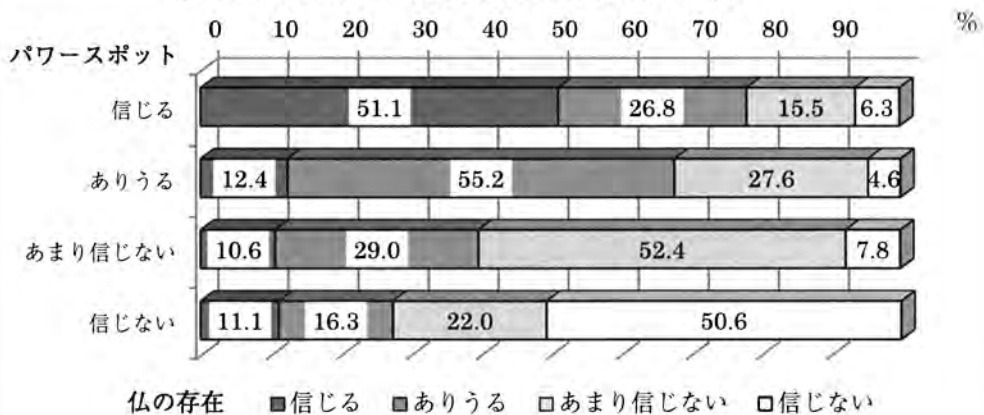
グラフ14 パワースポットと靈魂の存在(2010年)

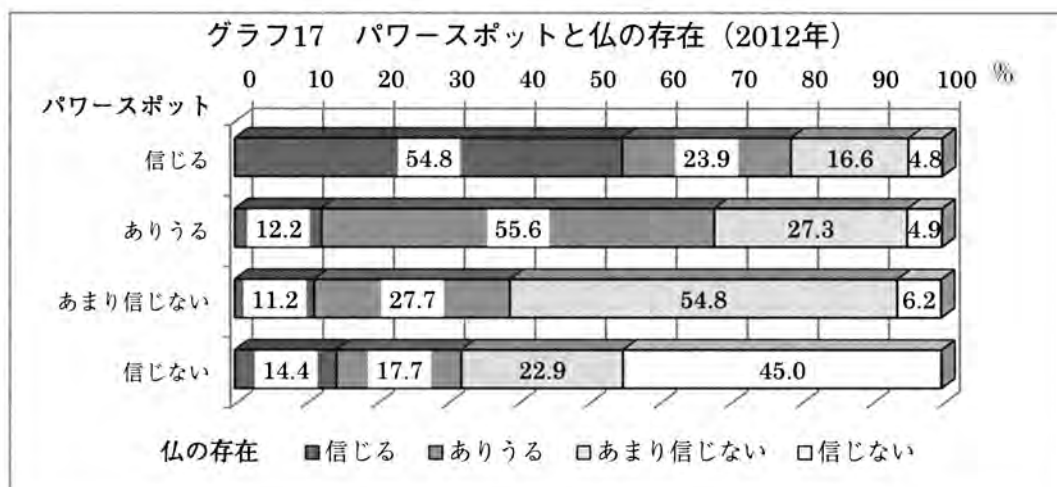


グラフ15 パワースポットと靈魂(2012年)



グラフ16 パワースポットと仏の存在(2010年)





3. 宗教に関わる評価の微妙さ

アンケート調査における信仰の有無に関する回答のブレという問題は、宗教に関わる評価と関連をもっている。どのような視点から宗教についての意識なり行動なりが問われているかの感じ取りが、回答結果に影響を及ぼす可能性があるということである。宗教に関わる事柄への評価の微妙さは、意識調査における別の項目から検討してみたい。

2001年を除いて2012年の調査に至るまで毎回質問した項目がある。それは「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」という意見に対してどう思うかというものである。回答の選択肢は次の4つである。

1. そう思う
2. どちらかといえばそう思う
3. どちらかといえばそう思わない
4. そう思わない

「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を肯定派とすると、肯定派の割合は、21世紀になっておおむね増加傾向にある。(グラフ18参照) これは先ほど示した信仰があると答える割合の21世紀にはいつてからの増加傾向と呼応している。

他方で、若い世代で「宗教はアブナイ」といった表現がよく聞かれることを踏まえて、「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」という意見についてどう思うかを聞いた。回答の選択肢は上記と同じである。この質問項目は1998年から6回設けている。

宗教はアブナイと思う人の割合は少しずつだが減少傾向にある。(グラフ19参照) その中で2005年はアブナイと思う人の数値が前後と比べやや高い。これにも実は質問項目の構成が関係している可能性がある。というのは、2005年以外は、この二つの質問は宗教に関するさまざまな意見を聞く中に含まれている。たとえば最初にこの二つを同時に聞いた1998年調査では、次の6つの意見に対してどう思うかを質問してある。

1. 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要だ」
2. 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」
3. 「先祖は自分たちを見守ってくれている」

4. 「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」
5. 「いろいろな宗教があるが結局は同じことを目標にしている
6. 「自分が日本人であることに誇りをもちたい」

また 2012 年調査では次の 6 つであった。

1. 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ。」
2. 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」
3. 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ。」
4. 「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない。」
5. 「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ。」
6. 「宗教を信じると、心のよりどころができる。」

つまり宗教に対する肯定的な意見と否定的な意見とが混在している。これに対して 2005 年の調査では、宗教に対する肯定的な質問と否定的な質問とが分けられたような構成となっている。宗教が必要と思うかは、次のような質問群の中にあった。

1. 「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要なだ」
2. 「先祖は自分たちを見守ってくれている」
3. 「いろいろな宗教があるが結局は同じことを目標にしている」
4. 「宗教を信じると、心のよりどころができる。」
5. 「靈感・霊視というものはある」

これらはだいたい宗教を肯定的に捉えた意見をならべてあり、それに対する賛否を問うている。他方、宗教はアブナイかどうかは、次のような質問群の中に置かれていた。

1. 「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ。」
2. 「宗教がらみの事件が多いので、宗教には警戒している。」
3. 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」
4. 「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない」
5. 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ」

最初の質問は例外だが、2～5は、宗教に関するマイナスイメージを連想させるような質問内容である。これによって、アブナイと答える人が他の年に比べて少し増えた可能性がある。これはもはや証明はできないが、回答のブレというここでの中心テーマからすると、こうした質問の構成なりコンテキストなりも考慮すべきであろう。

さて、「どんなに科学が発達しても宗教は人間に必要なだ」という意見への肯定派が 5～6 割であるが、他方で「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある。」という意見への肯定派も 5～6 割である。この 2 つはそれぞれ宗教に対する肯定的な評価と否定的な評価である。肯定的評価と否定的評価がともに過半数を占めたということになるので、両者の相関性を確認してみたい。この 2 つの質問を同時に行った初めての調査は 1998 年のものであり、最近の 2012 年の調査でも合わせて行った。そこで 1998 年と 2012 年の分で、この 2 つの質問への結果をクロス集計してみる。(グラフ 20 と 21 を参照)

また絶対値で比較した方が分布が分かりやすいので、グラフ 22 には、2012 年の結果をそれぞれの人数で示した。

なおグラフ中の記号は次のとおりである。

++ : そう思う

- +： どちらかといえばそう思う
- ： どちらかといえばそう思わない
- ： そう思わない

1998年の調査でも2012年の調査でも、「宗教は必要だ」と思う人は「宗教はアブナイ」と思う割合がやや少ない。他方、「宗教は必要だ」とは思わない人は、「宗教はアブナイ」と思う割合が、他の3つを選択した人に比べてはっきりと多いことが分かる。宗教は必要だと思ふ人は宗教はアブナイとは思わない傾向にあるということで、これはごく自然な結果と言える。

しかし、「宗教は必要だ」と思っているも、宗教はアブナイと思う、あるいはどちらかといえばそう思う人の割合は、1998年も2012年も過半数に達する。つまり科学が発達しても人間に宗教は必要だと思ふ判断と、宗教はアブナイと思ふ判断とはかなりの割合で同居していることを意味する。グラフ22に示したのはそれぞれのカテゴリーの回答者の絶対数であるが、これで見ると、どちらかと言えば宗教は必要と思ひ、同時にどちらかと言えば宗教はアブナイと思ふ人がもっとも多い。

他方で、宗教は必要だと思わないが、アブナイとも思わないというグループもある。この回答のパターンはとりたてて矛盾しているわけではない。宗教に否定的な見方をしていなくても、宗教は必要とは思わないという判断は十分ありうるからである。しかしこのような回答者は比較的少数である。

宗教は必要だと思ふ人が宗教はアブナイとは思っていないかったり、逆に宗教は必要だと思わない人が宗教はアブナイと思っていたりするの、ある意味自然であり、矛盾とは言えない。この観点から、2つの質問への回答をマトリックスにしてみると、次のように整理できる。

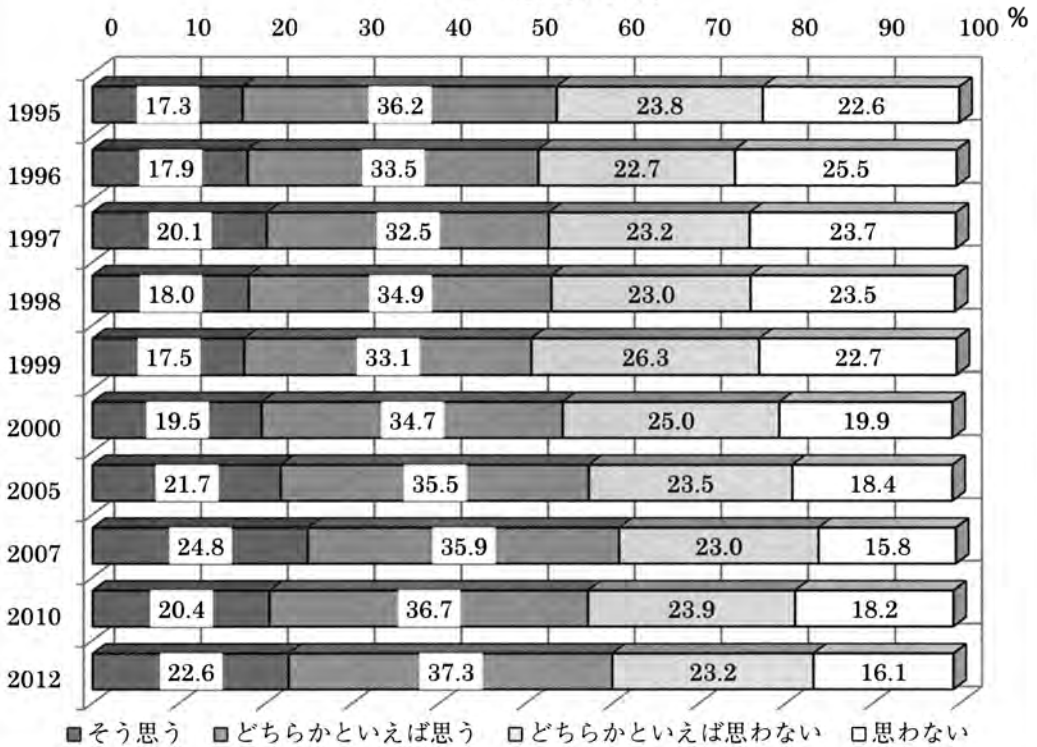
	宗教は必要	宗教は必要でない
宗教はアブナイ	やや矛盾	自然
宗教はアブナくない	自然	ありうる

宗教は必要と思ひながら、アブナイとも思ふ人の存在が注目される。「そう思う」という回答と「どちらかというところそう思う」を肯定派、「どちらかというところそう思わない」と「そう思わない」を否定派としてみる。そうすると宗教は必要だということへの肯定派の50%が、宗教はアブナイということの肯定派になる。

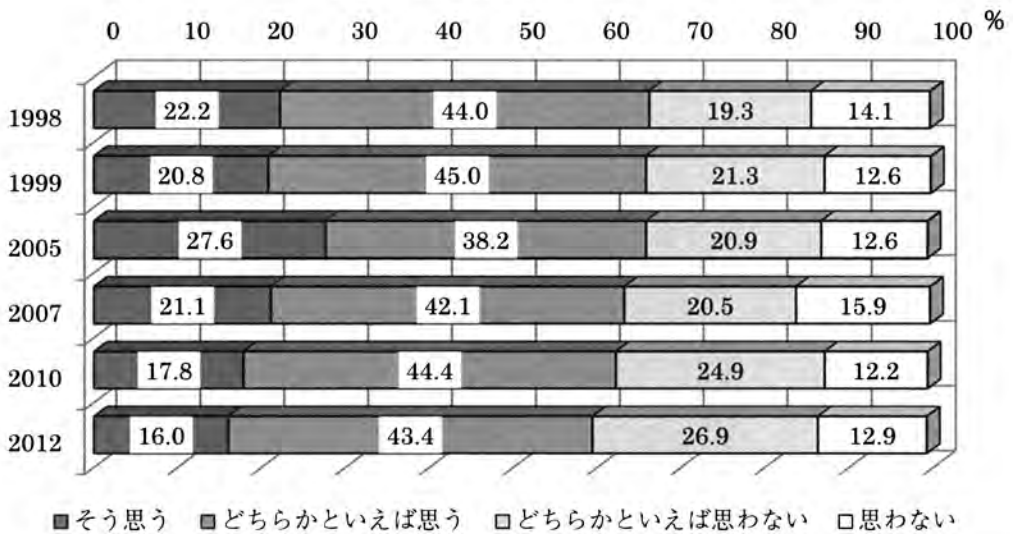
質問のコンテキストは重要で、必要かどうかは科学の発達という文脈での宗教の存在意義を問うている。アブナイかどうかは、むしろ直接的にその人の宗教への判断を問うている。それぞれの質問において回答者が思い浮かべた「宗教」が同じ内容であったかどうかは知る由がない。しかし表現の次元に限るなら、前者は社会における科学と宗教の関係とコンテキストを提示しており、後者はより個人的な体験ないし感想を求める。

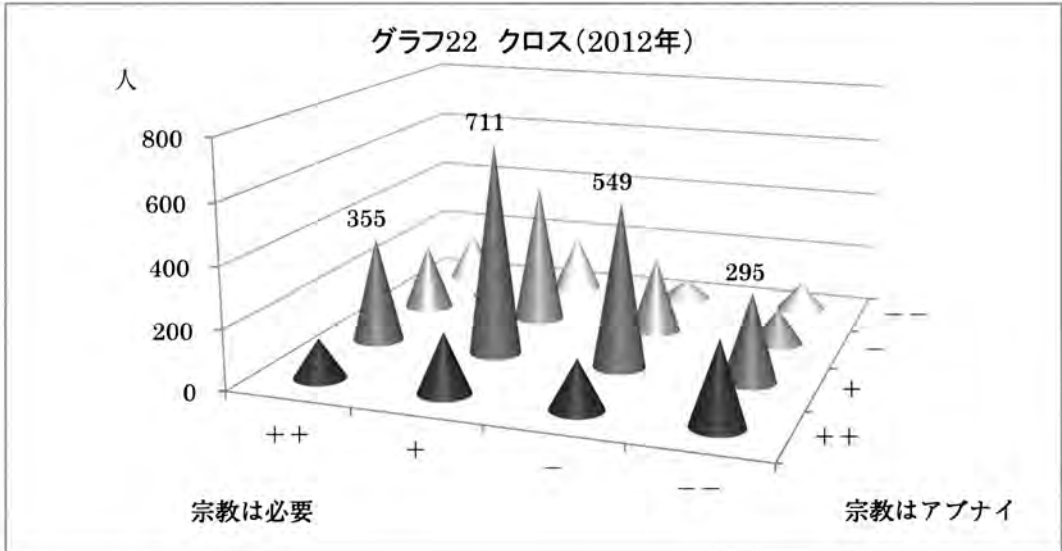
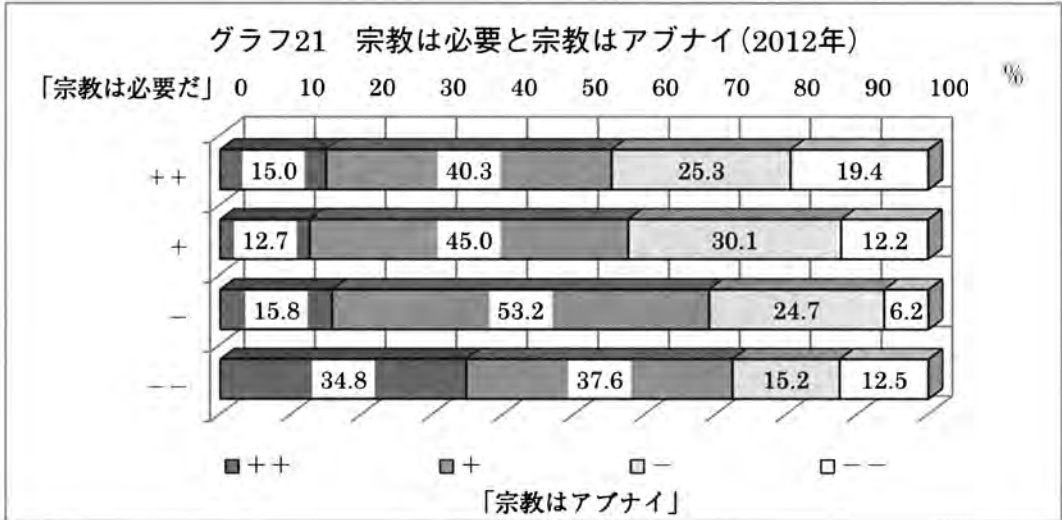
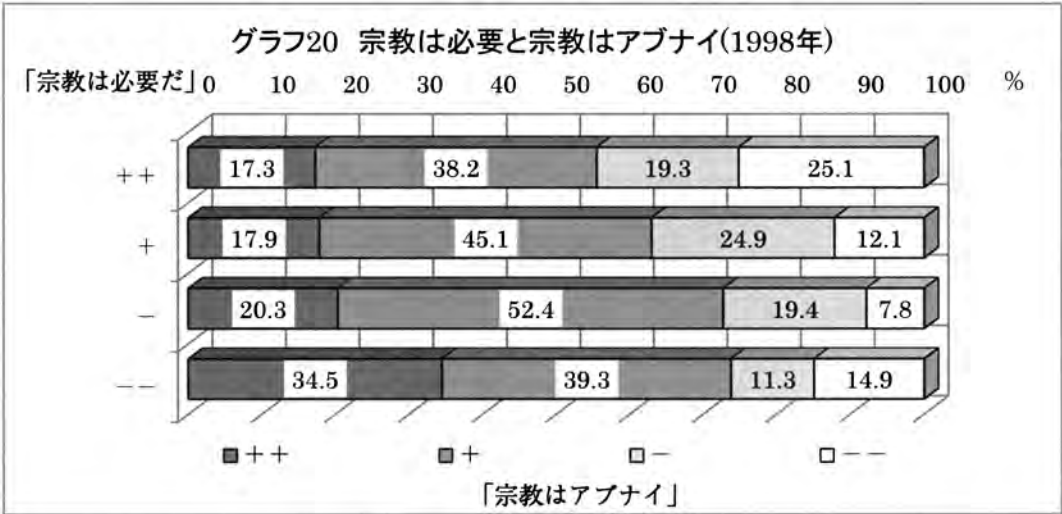
宗教や信仰で何を思い浮かべるかは、質問文の構成が回答者にどのようなコンテキストをもたらすかによっても左右される可能性を、この結果は示唆している。

グラフ18 宗教は必要



グラフ19 宗教はアブナイ





4. 宗教についてのイメージへの影響

質問のコンテクストにより、さまざまなイメージが喚起される「宗教」という言葉であるが、そのイメージの違いは、宗教教育をどう考えるかという際にも影響をもたらす。1995年のオウム真理教事件によって、宗教教育はにわかに注目されるようになった¹⁰。しかし宗教教育に関する議論においても、教育の対象となる「宗教」がどのようなものとしてとらえられているかが、意外に踏まえられていないことが多い。日本の学校教育においても、もっと宗教教育をした方がいいという意見が一部にあるが、学生の側はそれをどう受け止めるか。そして、その場合宗教はどのようなイメージでとらえられているのか。これに関する項目も1996年以降に設けられた。

1996～1999年の調査にかけては宗教教育に関して4回とも同じ質問がなされている。「高校までにもっと宗教についての基礎知識を教えるべきだ」という意見をどう思うかというものであり、回答の選択肢は「そう思う、どちらかといえばそう思う、どちらかといえばそう思わない、そう思わない」の4つである。

4回の調査とも「そう思う」と回答したのは1割強で、「どちらかといえばそう思う」と回答した人を含めたのを肯定派とすると、これが3割強であった。

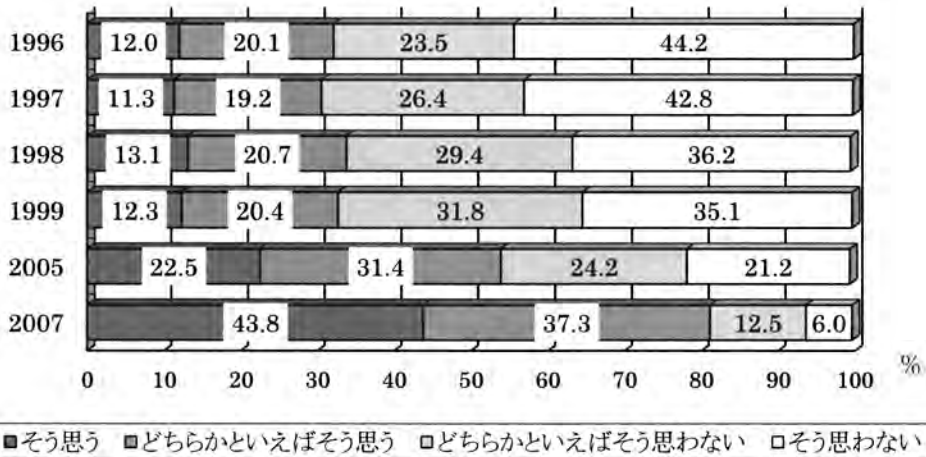
2005年の調査では質問を少し変えて、「高校までにもっと世界の宗教についての基礎知識を教えるべきだ」とした。つまり「世界の」という形容語を加えた。それだけで数値は大きく変わった。「そう思う」は2割を超し、ほぼ2倍となった。肯定派は5割を超した。この間に宗教に対する見方が大きく変わったとは考えられない。「宗教についての基礎知識」と「世界の宗教についての基礎知識」では、「宗教」という語によって喚起されたものに違いが生じたと理解するのが適切と考える。「宗教」と「世界の宗教」では印象が大きく異なることは、何度か講義において学生たちに確認した。

さらに2007年には「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」という選択肢に変えたところ、「そう思う」は4割を超え、肯定派は8割を超えた。この質問文では「世界の宗教」が「日本や世界の宗教文化」と変わったのみならず、「知識を教えるべきだ」の部分が「知識を学んだ方がいい」になっているから、前半部分の変化の影響だけを論じられない。しかし、ただ「宗教」と表現した場合と「宗教文化」という表現になった場合では、そこで喚起される「宗教」の内容が変わりうる。(グラフ23参照)

どんなこと、どんな現象までを宗教とみなすかの、宗教の境界線は、問い方、宗教の前後に来る言葉など、コンテクストで異なることがここでも確認される。一般的な問題として聞かれたときと、体験を踏まえた聞き方で異なる。伝統宗教を連想させるか、教団的な宗教を連想させるかでも異なる。宗教文化という言葉が示されたときの「宗教」がイメージさせるものは、宗教という言葉単独の場合と比べて異なってくるのだと考えられる。

逆に言うなら、一貫した宗教イメージがあると想定すること自体が疑わしいのである。宗教はその関連の語とともにある概念であり、誰かが発する文章の中でのものであるということを考えるべきである。統計上の数値のブレもそこに依存するのであり、この点を無視すると、相互のデータは矛盾に見えたりする。

グラフ23 宗教(文化)についての基礎知識



コンテキストにあまり依存せず、自分は信仰をもっていると表明する人も一定数いると考えるべきである。「意識調査」において、「信仰をもっている」と答えた人の割合は、ほぼこれに相当するとみなしていいだろう。逆に、いかなる場合にも宗教に否定的である人も存在する。「意識調査」におけるいくつかの回答結果から推定すると、1割少々であると推測される。

信仰をもっていることを明確に回答し、かつ宗教の必要性をはっきり肯定している学生は数%である。そういう人は自らが形成した宗教ないし信仰の境界線がそれなりに明確である可能性が高い。何をもって信仰があるときみなすかの基準があるということである。しかし、アンケートに答えた大半の学生はそうではないと見た方がいい。宗教や信仰の問題をきちんと考えたことさえない人も相当数にのぼるだろう。とすると、それがどのようなものと認知されるかは、まさに質問によって触発される割合が少なくないと推測される。

現代の日本社会においては、宗教を信じる、信仰をもつ、というような場合の宗教と、社会慣習化している宗教的な実践の間に一つの見えない境界線が存在するのは確かである。しかし、それは揺れ動く可能性がある。したがって、日本人の信仰とか、宗教観というものを統計的手法によって調べようとするときは、まさに質問そのものが用意した認知のフレームというものを、調査者がはっきり自覚しなければならないことになる。

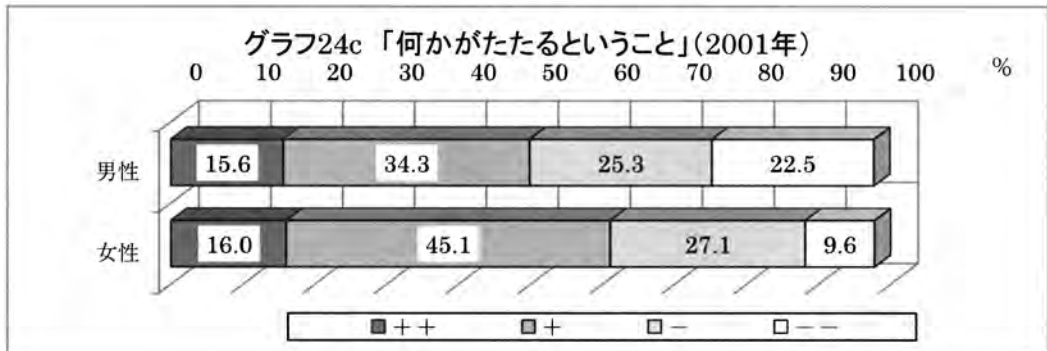
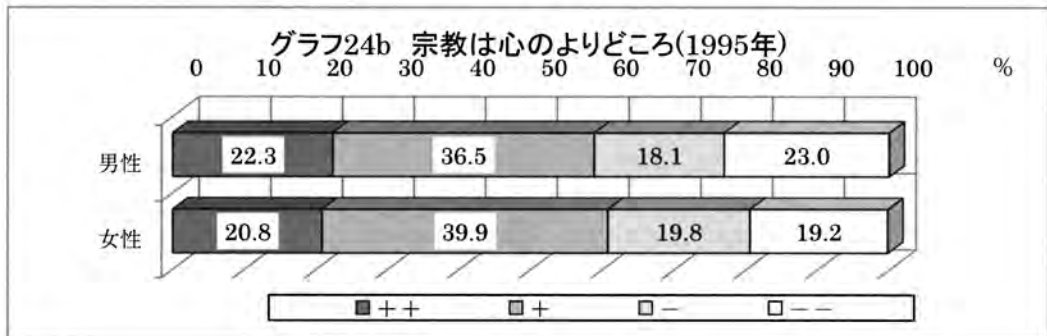
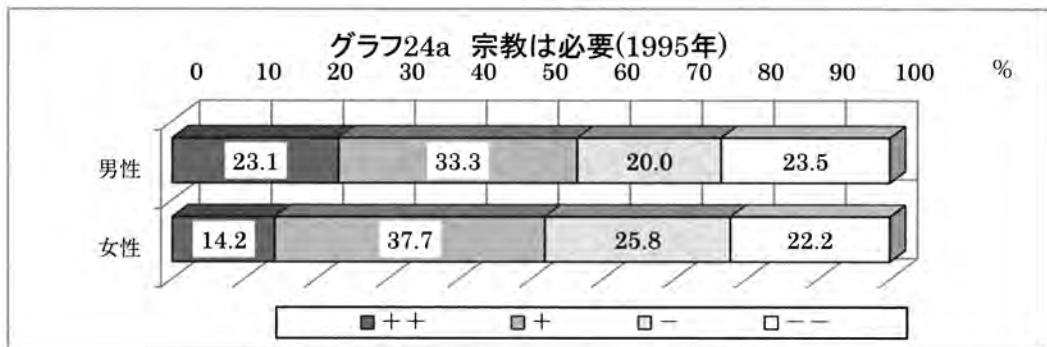
5. 性別による回答の違い及び二択と四択の関係—回答のズレに関する補足

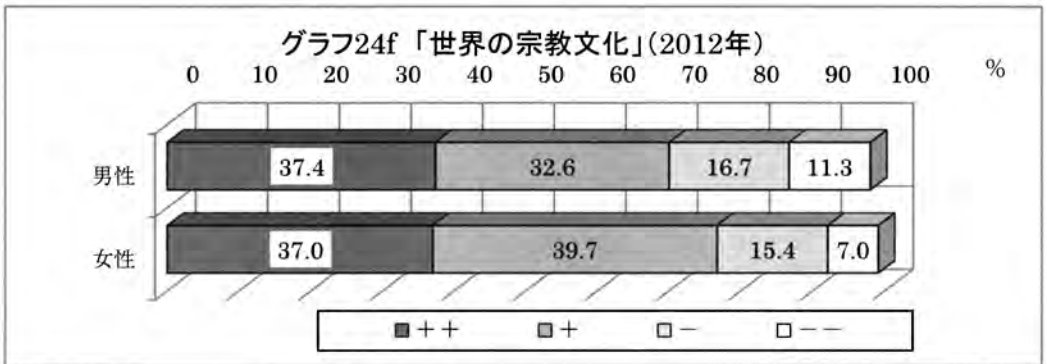
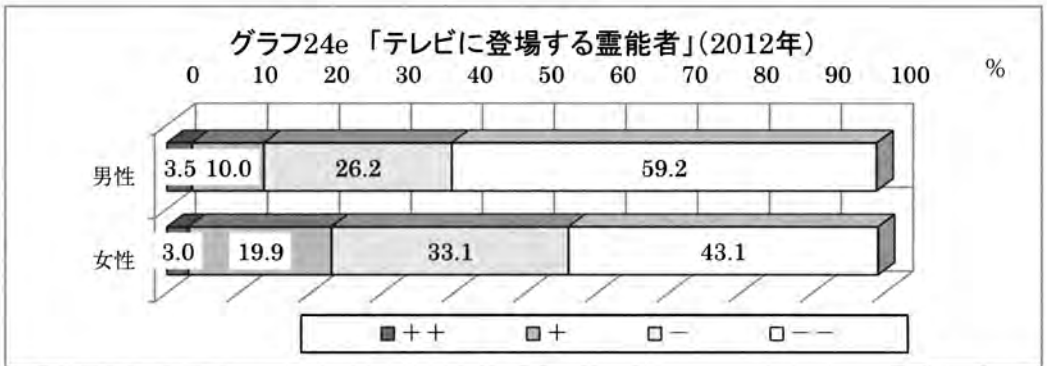
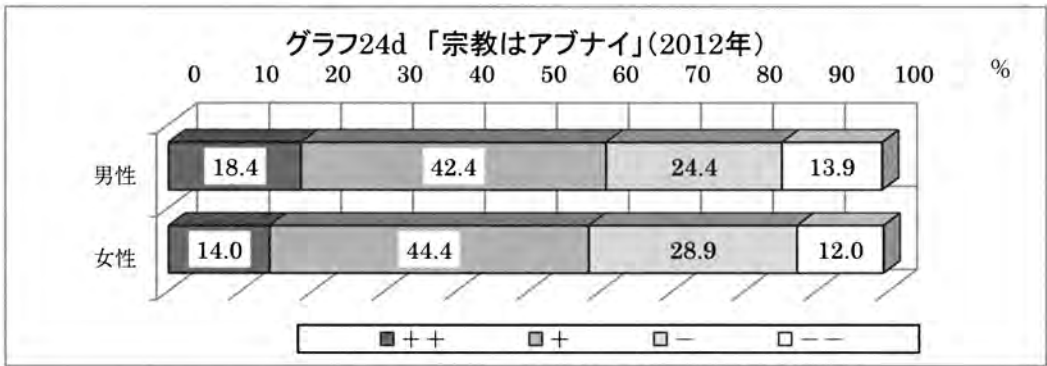
ここで「意識調査」からうかがえる回答の傾向について、2点ほど付け加えておきたいことがある。この調査ではある事柄に肯定か否定かの意見を求める場合、回答の選択肢を用意した場合、一部は二択であるが、基本的には4つの選択肢を設けた。すなわち、「そう思う」(++)及び「そう思わない」(--)という明確な肯定・否定と、「どちらかといえばそう思う」(+)及び「どちらかといえばそう思わない」(-)というゆるやかな肯定・否定である。

ここから2つの傾向が見いだせたのである。まず1つは、男子学生は女子学生よりも明確

な肯定・否定の回答の割合が多いという性別による傾向の違いである。これはほぼすべての質問項目、すべての調査年度にあてはまる。具体的に示してみる。6つの調査結果を例として選びグラフ24 a～24 fで示した。どの年の調査結果を見てもこれらの問への回答の傾向は同様である。

- (a) 「どんなに科学が発達しても、宗教は人間に必要なだ」への回答（1995年）
- (b) 「宗教を信じると、心のよりどころができる」への回答（1995年）
- (c) 「何かがタタルということはあると思いますか」への回答（2001年）
- (d) 「一般的に宗教は、アブナイというイメージがある」への回答（2012年）
- (e) 「テレビに登場する霊能者は、本当に霊と交信している」への回答（2012年）
- (f) 「高校までに日本や世界の宗教文化についての基礎的な知識を学んだ方がいい」への回答（2012年）





明確な肯定・否定（++と--）の合計をAとし、ゆるやかな肯定・否定（+と-）の合計をBとして、 $A \div B$ を計算してみると、次のようになる。値が大きいくほど肯定・否定いずれであっても明確に意見を表明していることになる。男女で比較すると男性が女性の1.24～1.99倍である。明らかに男性の方があらゆる質問に明確な回答をする傾向がある。

- (a) 男性 = 0.87 女性 = 0.57 (1.36倍)
- (b) 男性 = 0.83 女性 = 0.67 (1.24倍)
- (c) 男性 = 0.64 女性 = 0.35 (1.80倍)
- (d) 男性 = 0.61 女性 = 0.43 (1.43倍)
- (e) 男性 = 0.48 女性 = 0.35 (1.36倍)
- (f) 男性 = 1.73 女性 = 0.87 (1.99倍)
- (g) 男性 = 0.99 女性 = 0.80 (1.24倍)

もう1つは、四択と二択との関係である。調査を始めた頃は、いくつかの質問の回答を実質的に二択にした（そう思うものに○をつける形式）。そして以後の調査で同じ質問をして回答だけ四択に変えたものがある。そのときの四択と二択の結果の関係である。四択の場合は上に示したように明確な肯定・否定とゆるやかな肯定・否定という構造だが、二択では肯定と否定である。

明確な肯定（C1）とゆるやかな肯定（C2）を合わせたものを「肯定派」（C）とし、二択の場合は「肯定」（D）とすると、おおよそ次のような関係があることが分かった。

$$D = C1 + C2 \div 2$$

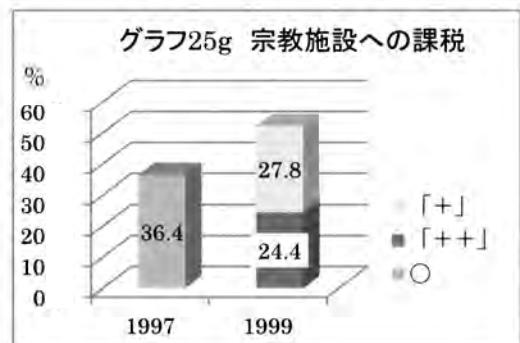
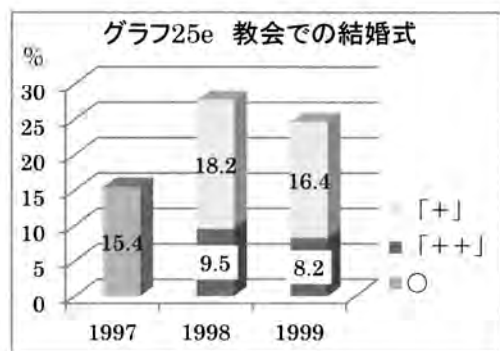
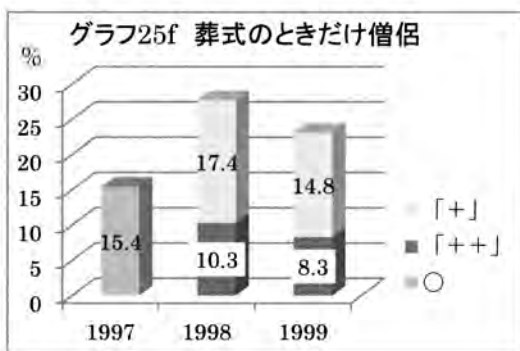
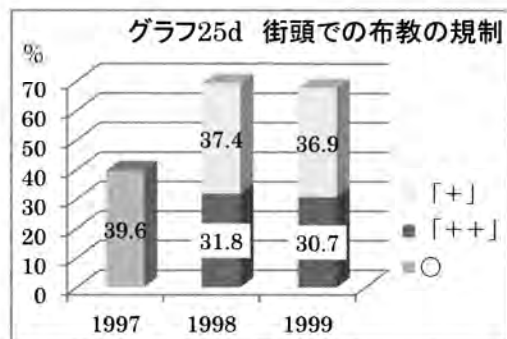
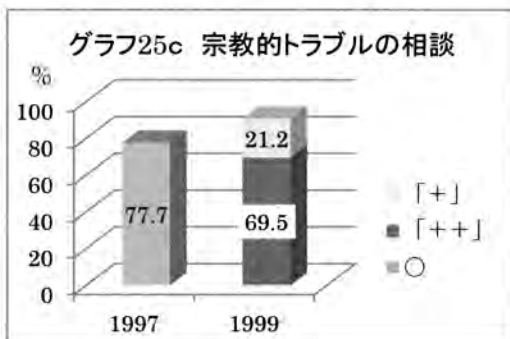
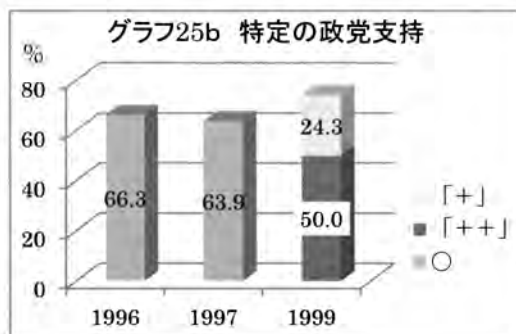
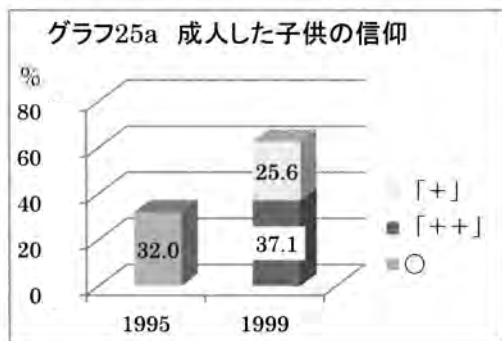
次の質問は、最初実質的二択からのち四択に変えたものである。これらを比較してみる。グラフ 25 a～25 g の凡例で○は二択での肯定であり、++は明確な肯定、+はゆるやかな肯定である。

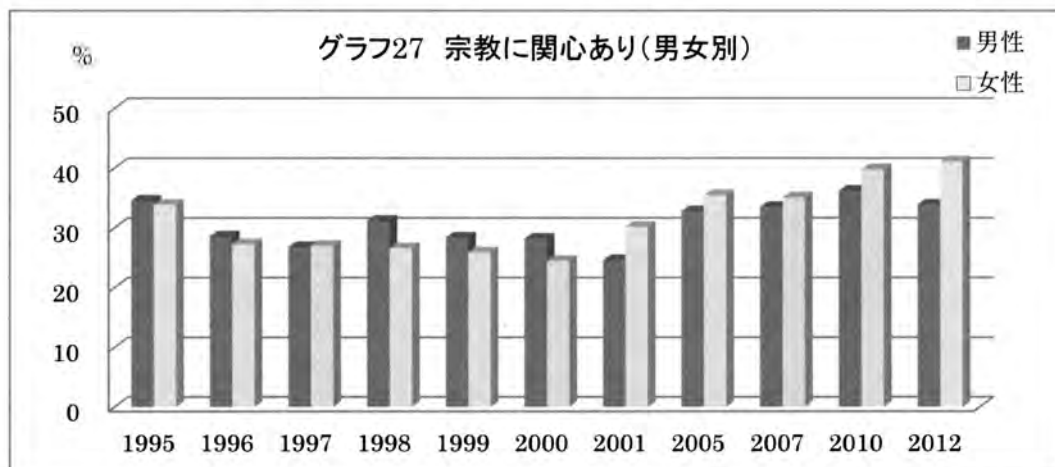
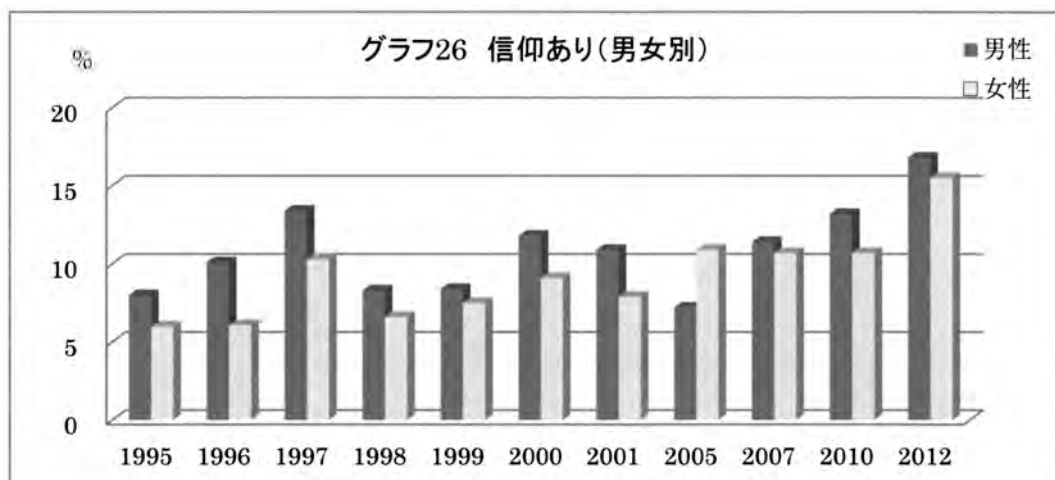
- (a) 「成人した子供の信仰に親が干渉するのはおかしい。」
- (b) 「特定の宗教団体が特定の政党を支持するのはよくない」
- (c) 「宗教的トラブルがあったときに相談できるような公的な窓口の設置が必要だ」
- (d) 「街頭での布教は迷惑だから、法律によって規制すべきだ」
- (e) 「クリスチャンでない人が、キリスト教会で結婚式をあげるのはおかしい」
- (f) 「ふだん信仰のない家が、葬式のときだけ僧侶（お坊さん）をよぶのはおかしい」
- (g) 「神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ」

グラフを見ると、aのみが例外であるが、他はおおよそ先の式が成り立つことが分かる。そうすると、ある事柄を肯定するかどうかを「肯定派」で考えるのと「肯定」で考えるのでは、場合によって10%以上の開きが出てくることがある。たとえば、「神社、寺院、教会などの宗教施設は現在税金がかかっていないが、一般の建物と同じように課税すべきだ」であると、二択による「肯定」は36.4%だが、四択による「肯定派」は52.2%で過半数となる。どちらを採用するかで、かなり異なった評価になる可能性がある。

明確な肯定・否定で事柄への意見や態度を判断するか、あるいはゆるやかな肯定・否定を含めて判断するかで、数値にはかなりの変化が生じる。細かな回答のプレを検討するときには、こうした選択肢のあり方にも留意すべきである。

女性が男性よりもゆるやかな肯定・否定を選ぶ傾向があることは、宗教の境界線に関してもややゆるやかになっている可能性を想定できる。というのも、信仰の有無を男女別にみると、信仰があると答えた割合が男性の方が多いのが10回だが、信仰はないが宗教に関心ありと答えた割合が女性の方が多いのが6回と逆転する。当然誤差もあるが、ここに男性の方が明確に信仰の有無を回答し、女性の方がそれを避けたという可能性もある。（グラフ 26、グラフ 27 参照）





むすび

アンケート調査で宗教に関わる質問をしたときの回答のブレを手がかりにしながら、宗教の境界線はどのような条件のもとで揺れ動くかを考察した。日本人の宗教論は多々あるけれども、実際に一人ひとりが宗教についてどのようなイメージを抱いているか、何を宗教あるいは信仰と考えているか、といったことを知る材料は意外に乏しい。アンケート調査においては、あらかじめ調査者が用意した回答の選択肢の中から回答者が選ぶという形式が一般的である。自由記述により回答者のイメージを探ることもできるが、その場合今度は回答者の描く宗教の境界線を回答内容からある程度くみ取れるものかどうかの問題となる。ここで紹介したアンケート調査でも自由記述の部分が毎回少しずつもうけられているが、あまり多くの記述はないし、そこから回答者の宗教イメージを描くのはなかなか困難である。

本稿での議論の眼目は、継続して実施したアンケート調査への回答におけるマクロな傾向から、宗教の境界線が揺れ動く要因を推定したことである。1つは質問のワーディング、つまりどのような言葉、表現を用いるかである。たとえば宗教、世界宗教、宗教文化とでは、宗教を含む3つの語に含まれた宗教のイメージが微妙に異なってくる。それが回答結果にも

影響をもたらすということである。

もう1つは質問文が背景に備えているコンテキストである。このコンテキストを意識する人もいるだろうし、まったくコンテキストは関係なく、一つひとつの質問に答える人もいるだろう。しかしアンケート全体が宗教のポジティブな面に焦点を当てようとしているか、それともネガティブな面に焦点を当てようとしているかで、回答にブレが生じる可能性がある。科研調査は宗教文化教育への関心に焦点を当てていたため、意識調査よりも宗教が社会において果たしている役割や機能について幅広く提示する内容になった。これが回答者の信仰の有無に関する判断に影響を与えた可能性があることを指摘した。

そしてこうした回答のブレの背後に、そもそも宗教とか信仰という問題に、現代日本人の多くはあまり明確な規定をしていないという現状の影響を想定できる。よく言われるように、宗教を信じている、あるいは信仰をもっていると答える人は2～3割であるのに、初詣に行く人は7割に達するというのは、初詣は信仰に基づくものではないと考える人が過半数を占めるということを語っている。意識調査でもその年の初詣に行った学生、前年のお盆に墓参りに行った学生は、いずれも毎回5割前後の数値を示している。つまり大半はこれらは信仰に基づく行為ではないと認識していることになる。

ではそうした社会的慣習、習俗的な行為と宗教的行為の境界線は、それぞれ明確に意識されているかという、必ずしもそうではないのであろう。それが質問文の表現法やコンテキストによって回答にブレが生じる一因と考えられるのである。

ここで扱った課題は、広く言えば、宗教という問題に関する人間の認知のゆらぎに関わる。宗教は文化的構築物であるから、その構築物の境界線がどこにあるかは一義的に定めることが不可能といっている。あまり省察することなしに宗教の境界線の中に含まれているものと、通常曖昧にとどめおかれるが、状況によって境界線の内側にはいつてくるといようなものが考えられる。最終的にある行為が宗教的かどうかの個人の判断は、つねに同一ではなく、行為をどのような言葉で表現するか、どのようなコンテキストの中で考えるかによって変わる可能性がある。

これは最近の脳科学で、人間の脳皮質における判断が、いくつかの並行処理ののちに、ある支配的なものが意識に上るといいう仕組みを提唱していることに合致する見方でもある¹¹。自分は宗教的であるとか、信仰心があるという認知と、自分は非宗教的であるとか、信仰心はあまりないといった認知は、同一人物の中に共存し得ないものではないということである。信仰に関する認知が他者からの問いかけ（環境）に応じてブレが生じるというのは、むしろ当然のプロセスであるとするなら、こうしたアンケート調査の結果の吟味は、そのブレの度合いが、用いられる概念や必然的に生じるコンテキストがどの程度の影響を与えるものかという議論への貢献と考える。

注

- 1 平均して30～40の大学から4,000～6,000名程度の学生の有効回答を得ている。1999年だけ73校、10,941名の有効回答者数となっているが、これは理由があって特別に大規模にしたものである。首都圏が多いが全国的な調査である。11回の調査結果はすべて報告書が作成されており、回答結果の集計ならびに対象とした大学名、調査メンバー等が記されている。また調査結果を踏まえた書籍、論文も数多く刊行されている。これについては下記のURLを参照のこと。

<http://www.kt.rim.or.jp/~n-inoue/index.files/jasrs.htm>

- 2 1992年4月～6月に32の大学の4,005名の学生を対象に行った調査。この調査では「宗教についてのあなたの関心は、次のどれにあてはまりますか」という質問をもうけ、3つの回答の選択肢をもうけた。1.特定の宗教を信じている。2.特定の宗教を信じてはいないが、宗教には関心がある。3.宗教を信じていないし、関心もない。この質問に1を選んだ割合は全体で17.1%、非宗教系の大学で11.2%であった。「特定の宗教を信じている」というふうにかなり教団宗教を想定させるような選択肢であったが、非宗教系で一割を超したのである。調査結果は井上順孝『宗教教育に関するアンケート』報告書』（国学院大学日本文化研究所、1993年）にまとめられている。
- 3 これについては拙著『若者と現代宗教』（筑摩書房、1999年）の第1章を参照。
- 4 報告書は『宗教文化教育に関する学生の意識調査報告書』（大正大学、國學院大學、大阪国際大学、神戸大学）として2009年2月に刊行された。36の大学から5,005名の学生の有効回答を得ている。
- 5 個人的な経験であるが、1つ端的な例をあげたい。新宗教に関する講義のあとでは、それ以前に比べ新宗教への評価が変わる学生が少なくない。よく見られるパターンとしては、「新宗教はアブナイ、変な宗教である」というような印象をもっていた学生が、「新宗教もさまざまであることが分かった、それなりに社会で受け入れられている理由は分かった、だからといって入信したいなどとは思わない」といった変化である。これは筆者の講義の内容が影響しているからであり、別の教員が講義をすれば、また別の変化になると推測される。ただし、新宗教について講義する教員が、似たような経験を述べる人が多いことも付記しておきたい。
- 6 1990年代前半には国学院大学日本文化研究所の宗教教育プロジェクトによって全国の40ほどの宗教系学校を実態調査したが、高校レベルでも、キリスト教系の学校に通っている生徒が入信する例はきわめてまれであることが聞き取り調査で確かめられた。なお、この調査結果については、国学院大学日本文化研究所編『宗教教育資料集』（すずき出版、1993年）、及び同『宗教と教育』（弘文堂、1997年）を参照。
- 7 これも受講していた学生からの「告白」で、そうしたことがあることを個人的にも一度ならず経験している。
- 8 ちなみに2010年と2012年の調査ではこれに「パワースポット」を加えたが、いずれの年も信じる割合は選択肢に示した4つのうち最も低かった。
- 9 なおサブカルチャー的要素の強いテレビの霊能番組の影響については、拙論「霊能番組への関心と宗教情報リテラシー ―第9回学生宗教意識調査の結果を中心に―」（『國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所年報創刊号』2008年）において分析をした。スピリチュアルなことがらへの関心の強さと霊の話の信じることとの間には、はっきりした相関関係が見いだされた。
- 10 1995年以降に展開された宗教教育に関する議論の背景にあるものと、そこでの議論を踏まえて提起された宗教文化教育については、拙論「グローバル化・情報化時代における宗教教育の新しい認知フレーム」（『宗教研究』369（85-2）、2011年所収）と、同「情報時代の宗教教育を考える」（聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』春秋社、2013年所収）を参照。
- 11 たとえばアンディ・クラーク『現れる存在』NTT出版、2012（原著 Andy Clark, *Being there: Putting Brain, Body, and World Together Again*, MIT, 1997）やクリストフ・コッホ『意識の探求』岩波書店、2006年（原著は Christof Koch, *The Quest for the Consciousness: A Neurobiological Approach*, Roberts & Publishers, 2004）など、意識の生成を扱った議論では通説となってきた。

本論文は科学研究費補助金基盤研究（B）「宗教文化教育の教材に関する総合研究」（研究代表者・井上順孝）による成果の一部である。